

第3章 西洋哲学史における富への限界

著者: Matthias Kramm and Ingrid Robeyns

1. 序論

近年、作家、活動家、政治家たちから、個人が稼ぐまたは所有できる額に上限を設けるべきだという呼びかけがいくつもなされてきた。例えば、2018年3月2日、アメリカの政治家Kaniela Ingは次のようなツイートを公開した:「誰かの富の獲得はどの時点で多すぎるのか——10億ドル、100億ドル、1000億ドル、1兆ドル? 私の言葉を覚えておいてほしい: この道徳的問いは今後数年間で非常に、非常に重要になるだろう。私たちはそれを問う勇気のあるリーダーを必要としている」。

同時に、哲学者たちも、人や世帯が所有できる富の額に厳格な上限があるべきであり、理想的な状況では誰も超富裕ではないべきだという考えを調査し始めている(Robeyns 2017; Neuhäuser 2018; Volacu & Dumitru 2018; Zwarthoed 2018; Timmer 2019)。

富への上限という考えには歴史的前身があるのか? これが本論文で取り組む問い合わせである。私たちは西洋思想の正典における複数の著者の関連する見解を議論する: プラトン、アリストテレス、トマス・アクィナス、ジョン・ロック、アダム・スミス、ジョン・スチュアート・ミル、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルス、ジョン・メイナード・ケインズ。

これらの著者の私たちの読解は、プロト・リミタリアン的主張が少なくとも四つの異なる道徳分析の領域でなされてきたことを示している:

1. 道徳心理学: 不飽和性の主張(セクション2)
2. 道徳的推論: 手段-目的の主張(セクション3)
3. 德倫理学: 節制や気前良さの主張(セクション4)
4. 政治道徳: 必需品と贅沢品の主張(セクション5)

新しい区別: 行為・政策・分配

私たちの歴史的読解から出現する一つの区別は、リミタリアン的行為、リミタリアン的政策または制度、リミタリアン的分配の間の区別である。

- リミタリアン的行為: 個人が多額の金銭を持つことは間違っていると決定し、それを与える
- リミタリアン的政策/制度: 金銭の獲得に上限を設ける
- リミタリアン的分配: 誰も富裕線以上で生活していない

2. 不飽和性の主張

プラトン: 魂の三部構造

プラトンによれば、魂は三つの部分から成る:

1. 理性的部分: 知恵を愛する
2. 気概的部分: 名誉を愛する
3. 欲望的部分: 利益を愛し、「金銭に対して最も飽くことがない」

プラトンは理性的部分が欲望的部分を支配すべきだと要求する。個人レベルでの金銭への飽くことのない欲望は不正義であるだけでなく、政治レベルでも問題である。彼は「金銭の際限ない獲得」を内乱と戦争の主な原因と同定する。

アリストテレス:貨幣と貪欲

アリストテレスは『政治学』で、二種類の富の獲得術を区別する:

1. **自然的富の獲得:** 家政管理の一部
2. **不自然な富の獲得:** 金銭それ自体の蓄積

金銭は本来、財とサービスを交換する手段であるべきだが、人々はしばしば金銭を目的それ自体と見なし、「金銭への欲望は無限」になる。

アリストテレス自身の推奨は、「過度に裕福でも貧しくもない市民」から成る中産階級によって統治されるポリスである。

3. 手段-目的の主張

トマス・アクィナス:富は手段であって目的ではない

アクィナスにとって、富は手段であって目的ではない。人間の究極の目的は神との結合であり、富はこの目的を達成するための道具に過ぎない。

したがって、アクィナスは富の過度の蓄積を二つの理由で批判する:

1. **目的の倒錯:** 手段を目的と取り違える
2. **隣人への義務の違反:** 余剰富は貧者と分かち合われるべき

ジョン・ロック:所有権の限界

ロックは財産権に二つの重要な制限を課す:

(1) 腐敗制限

人は、腐敗する前に使用できる以上のものを正当に専有することはできない。

(2) 充足性制限(Lockean Proviso)

専有は他者が十分を持つことを妨げてはならない。

4. 徳倫理学:節制と気前良さ

アダム・スミス:道徳感情と富

スミスは、富それ自体は幸福をもたらさないと論じる。彼は、節制と気前良さという徳を強調する。

ジョン・スチュアート・ミル:定常状態と富の限界

ミルは、「定常状態」——経済成長が止まる状態——の見通しを歓迎した:

「最良の状態は、誰も貧しくなく、誰もより富裕になることを望まず、誰もより後ろに押し回されることを恐れる理由がない状態である」

ミルは二つの主要な理由から定常状態を支持した:

1. **環境的理由:** 無限の経済成長は環境的に持続不可能

2. 人間的繁栄の理由: 真の幸福は富の蓄積ではなく、文化、教育、人間関係から来る

5. 政治道徳: 必需品と贅沢品

カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルス

マルクスとエンゲルスは私的所有の廃止を求めたが、これは生産手段の私的所有の廃止を意味した。マルクスは厳密にはリミタリアンではなかったが、極端な富の集中が構造的不正義を生み出すという考えを共有している。

ジョン・メイナード・ケインズ

ケインズのエッセイ「私たちの孫の経済的可能性」(1930)で、彼は技術の進歩により、人々は週15時間しか働く必要がなくなるだろうと予測した。彼は、金銭それ自体のための金銭愛を「やや嫌悪すべき病理」と批判した。

6. 結論: 現代的議論への教訓

主要な相違点

1. 本質的 vs 道具的議論

歴史的: 富の過度の蓄積が本質的に悪い

現代的: 道具的議論——富が他の悪を引き起こす

2. 道徳的義務 vs 政治的義務

歴史的: 境界が不明確(完全主義的政治観)

現代的: 区別が明確(自由主義的枠組み)

3. 行為・政策・分配の区別

三つのレベルのリミタリアニズム:

- 行為: 個人が過剰な富を与える
- 政策: 制度が富の蓄積を制限する
- 分配: 結果として誰も超富裕でない

現代的議論への教訓

1. プロト・リミタリアン的考えは多様である: 様々な哲学的伝統に見られる

2. 複数の正当化が可能である: 異なる理由(心理学的、手段-目的、徳、政治的)

3. 文脈が重要である: 歴史的文脈と現代社会は異なる

あなたのSoE研究への含意

手段-目的の議論の適用

トマス・アクィナス: 富は手段であって目的ではない

あなたのSoEへの適用: 支援は手段であって目的ではない

- 支援の目的: 利用者の自律性とempowerment

- 支援者の権力は、利用者の自律性を促進する限りでのみ正当化される

構造的批判

マルクス: 資本主義は構造的搾取を生み出す

あなたのSoEへの適用: 現行福祉システムは構造的権力非対称性を生み出す

- システムレベルの変革が必要
- Constitutional AIは、権力制限の制度的実装

© 2023 Kramm and Robeyns, CC BY-NC-ND 4.0

<https://doi.org/10.11647/OPB.0338.03>